

Title	教育空間創造ユニット: 野殿・童仙房での生涯学習の取り組み 2011年度
Author(s)	吉田, 正純
Citation	子どもの生命性と有能性を育てる教育・研究をめざして (2012), 活動報告書(2007-2011年度): 72-73
Issue Date	2012-03-30
URL	http://hdl.handle.net/2433/179725
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

野殿・童仙房での生涯学習の取り組み 2011年度

1. 2011 年度活動報告

2011年度は、3月11日の東日本大震災を受けて、「地域で生きる」とはどういうことか、そのために生涯学習・教育は何ができるのかを、自問自答するなかでスタートしました。京都大学教育学研究科と野殿・童仙房地区とのかかわりも6年目に入り、これからの持続的な連携のかたちを模索しながら、新たな試みもはじまりました。ここであらためて一年間の活動を報告し、ふり返ってみたいと思います。

2. 「3. 11 以後」の地域と教育

東日本大震災と福島第一原発の事故では、専門家や科学が独占する「知」の脆さ・危うさが明るみに出ました。また被災地の復興にあたって、日本の「いなか」の大部分が、高齢化や国際競争のなかで厳しい現実にとらわれていること、そしてそれが「原発依存」を強いてきたことも明らかになってきました。その一方で、土地と結びついた生業や人々の結びつきが、とても大切なものであることも、感じさせられた一年でした。今私たちは、日本社会が国内外で競争しあうだけの窮屈な社会をめざすのか、それともローカルな価値と生活を大切にしたい暮らしをとり戻すのか、分かれ道にいるような気がします。

これまで大学や教育は、経済発展や立身出世のために、権威的に「知」を人々から奪い取って、競争させ・教えこむことが是とされてきましたが、それは自分で考え生き延びていく力を奪うものだったかも知れません。私たち自身、大学・教育に関わるものとして、そのような「知」のあり方を反省的にとらえ直し、現場（フィールド）に根ざし地域（ローカル）でこそ生きる知恵・価値を、共に紡ぎ出す場をつくりたいと考えてきました。そのためには大学が専門的知を「上から目線」で持ち込むのではなく、人々がお互いに経験や想いをもちより、問題解決の道を探り出す「場」をつくることを、今年は目標としてきました。以下はその報告です。



▶「水曜ひろば」で陶芸体験

3. 「水曜ひろば」のはじまり

「水曜ひろば」は、地元の有志の方との話し合いの中で、子どもからお年寄りまで交流できる場として立ちあげたものです。2011年6月からほぼ隔週の水曜日の午後に、旧野殿童仙房小学校の教室ではじまりました。まず、小学校に残されていた写真や図書などを整理しながら、少しずつ居心地のいい空間をスタッフのみなでつくってきました。夏休みには乗馬体験や竹細工、秋以降は陶芸・手芸・苔玉づくり・お菓子作りなどを体験しながら、のんびりと語らい交流するなかで、自然に学びが生まれたらと考えました。地元の子どものやお年寄りだけでなく、大学や地域を訪れた人々もふらっと立ち寄って、思わぬ出会いが生まれることもありました。また、京都大学の学園祭では展示企画とあわせて、地元の方も参加して作品の販売も行ないました。

こうした取組のなかで、様々な問題が話しあわれました。閉校後は、おとなたちも含めて地域での交流の場が少なくなったことに加え、地元の子どもたちも習い事や学校行事で「忙しい」こと。また日々仕事に生活に忙しい皆さんが、地域に関わる機会をどのようにつくっていくのか。また、「新住民」の地域との関わり方や、子どもの育ちへの地域の「おとな」との関わりなどを、考えるきっかけになりました。これから「水曜ひろば」が、地域内外の人々が安心できる「居場所」として、また意見を交わし学び合う「ひろば」として、育っていくことを願っています。



▶野童いなか塾「季節の味を楽しもう」

4. 二年目の「野童いなか塾」

昨年度に続き地域内外の子どもたちを主な対象として、特に「地域に学ぶ」ことをテーマに、体験と交流を通じて学ぶ場として「野童いなか塾」を開催してきました。

4月には「みんぐ無量館」を訪問して館長の川下長久さんのお話を聞き、民具や伊勢音頭（ヤートコセ）に込められた、川下さんの思いを聞くことができました。

た。5月の「初夏の自然観察会」では、自然観察指導員京都連絡会の西川忠樹さんたちから、童仙房の動植物の魅力について楽しむ機会をつくっていただき、季節の移ろいを能動的に「見る・触れる」ことの大切さに気づきました。

また7月には「季節の料理を味わう」と題して、sun-aid Eisuke店主の阿山哲生さんにおいでいただきました。冬瓜を使った葛あんかけや、緑茶を細かく混ぜた茶塩など、「ひと手間」かける工夫と素材の活かし方を知ることができ、地元の方たちも熱心にレシピや手順をメモされていました。

同月の第6回「風と雲の広場」では、「科学と魔法の交差点」と題して、江角陸先生の偏光板を使った実験や、福田悠歩さん・鏑敬介さんのマジックショー、恒例の「彩京前線」の京炎そでふれ実演や天体観測などを体験ができました。科学と魔法という一見対極にあるものが、実はコインの両面で、実験と観察、挑戦と失敗を積み重ねてきたのが「科学」ではないかということを、楽しく考えさせられた一日でした。

後期は10月に第4回野童いなか塾として「秋祭り」見学を行なったほか、消防団の大会に参加するなど、今までになかった交流も生まれました。その中で東日本大震災の経験から、地域のなかの防災について見直し、災害に備える体制を話し合いたいという話が盛り上がり、第5回野童いなか塾をかねて「防災のつどい」を開催しました。「つどい」は地域の現状や課題をお互いに話し合う「談義」（ワークショップ）の形をとって、実際に災害が起こった場合の想定や対策などを話し合いました。道路や通信などのハード面に加えて、どこにお年寄りや病気の方がいるか、日ごろから、どうコミュニケーションをとるのか等、きめ細かな「地域防災」への関心が高まったと感じました。また1953年の「南山城大水害」では童仙房でも大規模な土砂崩れが発生し、「雷で昼のように明るかった」「小川が濁流になって家が流された」といった体験談を住民の方から伺いました。世代を越えてこうした経験を語り継ぐとともに、防災を通じて地域のあり方を話し合うことの大切さも感じました。防災についての学習は、京都大学防災研究所等とも連携しながら今後も継続していく予定です。



▶ 第6回「風と雲の広場」



▶ 野童いなか塾「防災のつどい」

5. 大学と地域が共に歩むために

このほかにも、9月に日本社会教育学会での二回目の発表となる「集合的記憶と再帰的实践」、11月に「教育空間創造ユニット」主催のシンポジウム「地域社会の教育力」等も行ないました。これらは野殿・童仙房で積み重ねてきた「フィールドでの学び」を、研究が一方的に収奪・利用するのではなく、どのように反省的にふり返し、地域に還していくのかを探究するものです。日本の地域社会全体が直面する厳しい状況の中で、私たちの取り組みはほんの入り口にすぎませんが、人々が自ら課題に直面して解決していく場として「地域」をとらえ直していく第一歩として、これからも共に歩んでいきたいと思います。

2011年度 活動一覧	
4月30日	第1回野童いなか塾「みんぐ無量館」（南山城村今山）訪問
5月15日	第2回野童いなか塾「初夏の自然観察会」（南山城村野殿地区）協力 NPO自然観察指導員京都連絡会
6月26日	童仙房区「出合」（草引き）参加
7月3日	第3回野童いなか塾「季節の味を楽しもう」講師 阿山哲生さん（sun-aid Eisuke店主）
7月23日	第6回「風と雲の広場」科学と魔法の交差点「鶴がお化粧する？～偏光の不思議」（江角陸先生）、「ふたりのマジックショー」（福田悠歩さん・鏑敬介さん）、京炎そでふれ実演（彩京前線）他
8月24-5日	研究開発コロキウム「ライフストーリーを活用した地域生涯学習の実証的研究（続）」―野殿・童仙房における記憶を共同生成し、地域の物語を構築する試み」 宿舎・聞き取り調査
10月16日	第4回野童いなか塾 童仙房大神宮「秋祭り」見学
11月13日	公開シンポジウム「地域社会の教育力 ―終焉それとも再生？」 於・京都大学芝蘭会館別館2階研修室 報告 上杉孝實先生（京都大学名誉教授）、松田恵示先生（東京学芸大学教授）、秋田光彦さん（浄土宗大連寺住職、應典院代表） コーディネーター 前平泰志
11月19日	第5回野童いなか塾「防災のつどい」共催 童仙房消防団 談義「童仙房の防災マップをもとに一生活の中における防災を考える」、炊き出し体験、「童仙房における水害の記憶」を語りつく
11月24-6日	京都大学学芸祭出展「童仙房」（陶器・苔玉ほか）
12月27-9日	前平泰志教授集中講義「生涯教育学特論」集中講義（木津川市の生涯学習調査の検討、フィールドワークほか）
12月29日	第6回野童いなか塾 年越しそば打ち体験
2月8日	「伊勢音頭（ヤートコセ）」に関する川下長久さんへの聞き取り
3月10日	講演会・交流会「食と農のこれからを考える～福島と童仙房をむすんで」 話題提供：祖田修先生（京大名誉教授） コメント：前平泰志 京都大学アカデミックデイ ポスター展示出品
水曜ひろば（第1～17回）	6月8・22日、7月13・27日、8月3・10・24日、9月14・28日、10月12・26日、11月9日、1月25日、2月8・22日、3月14・28日

（文責：吉田 正純）